

—第149-7次

調査対象域は、埋設管の掘形に合わせた東西1.7m、南北60mにわたる範囲である。そのなかで現代の井戸・水路および工事中の迂回路設置により調査不可能な場所が2箇所あるため、調査区を3区に分けて発掘をおこなった。以下、北から順に北区、中区、南区と称する(図91)。南北長は北区約20m、中区約15.5m、南区約12mで、総面積は約80㎡である。調査期間は2007年11月20日～12月6日である。

北区・中区・南区ともアスファルト除去後、道路造成土・旧水田耕土・床土を重機で掘削し、その後遺構検出をおこなった。基本層序は、地区ごとに若干異なる。北区は上から道路造成土（30～90cm）、暗青灰色砂質粘土・黄灰色砂質土（旧水田耕土、約30cm）、灰褐色砂質土・暗褐色砂質土・暗灰褐色砂質土（床土、30～50cm）、黄灰褐色砂

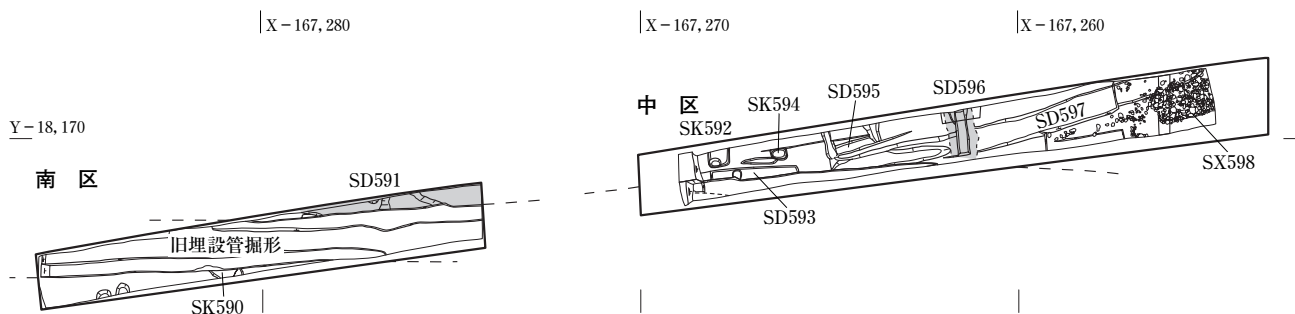


図91 第149-7次調査遺構図 1:200

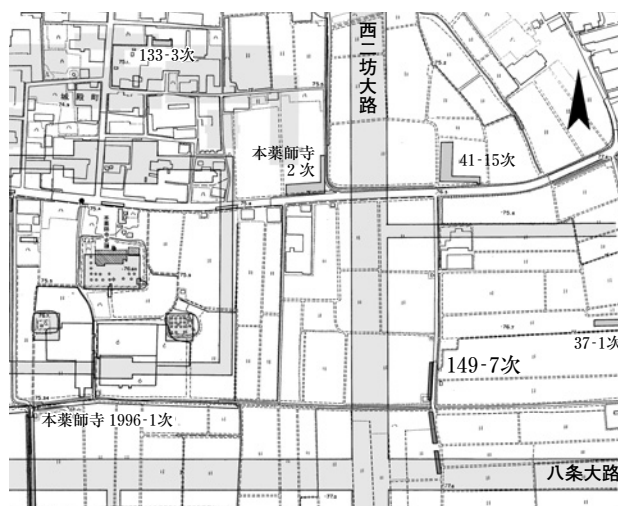


図90 第149-7次調査位置図 1:4000

質土（遺構検出面）である。中区は上から道路造成土（30～70cm）、暗青灰色砂質粘土（旧水田耕土、10～30cm）、灰褐色砂質土（床土、30～60cm）、暗褐色砂質土（遺構検出面）である（図92）。南区は上から道路造成土（60～70cm）、青灰色砂質土（旧水田耕土、10～20cm）、明褐色砂質土（床土、10～40cm）、淡灰褐色砂礫土・暗赤褐色砂質土（遺構検出面）である。遺構検出面の標高は、北区75.8m、中区76.4m、南区76.7m。それぞれ地表面からの深さは、北区約1.5m、中区約1.3m、南区約1.3mで、北から南にかけて徐々に地形が高まっている。

3 検出遺構

北区の遺構

素掘小溝のほか、いくつかの土坑を検出している。

土坑SK599・SK600・SK601 SK599は南北約160cm、東西70cm以上、深さ60cmの円形土坑。SK600は北側を小溝によって壊された、南北60cm以上、東西65cm以上、深さ35cmの方形土坑。SK601は中央部を小溝で壊された、南北約70cm、東西44cm以上、深さ30cmの方形土坑。いずれも柱穴の可能性も考えられたが、柱痕跡などは確認できなかったため、土坑と判断した。また、掘り込み面がそれぞれ層位的に異なっているため、異なる時期に属するが、いずれも古代から中世にかけてのものと考えられる。

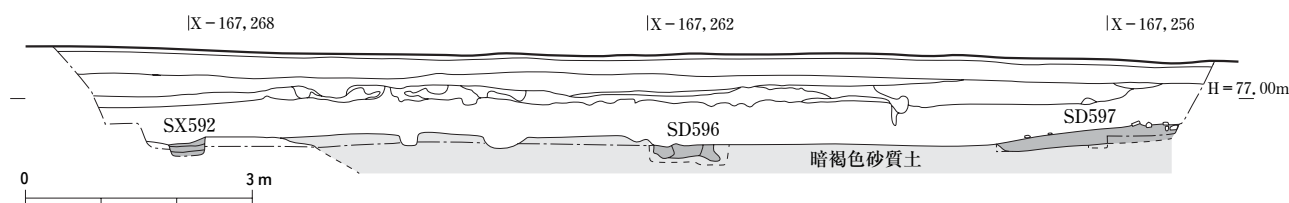


図92 中区西壁断面図 1:100

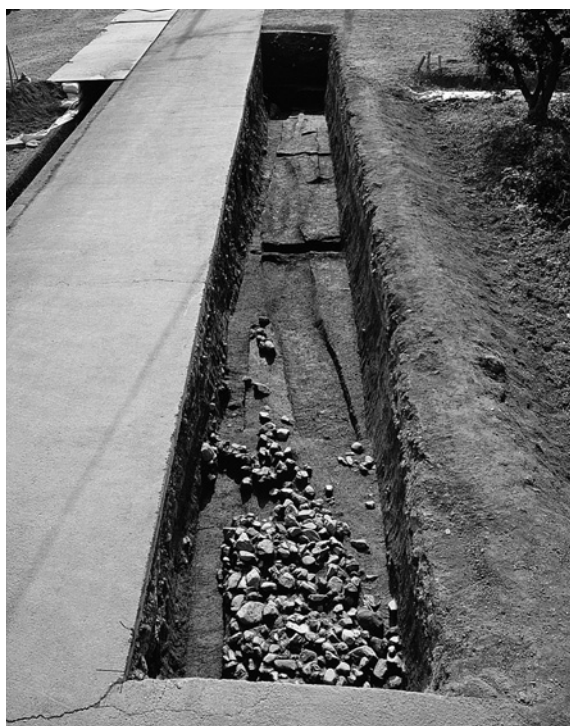


図93 中区全景（北から）

中区の遺構

石組溝SD596 中央部で検出した幅約30cmの東西石組溝。側石の大きさは20～30cm。風化しており、南北溝SD597によって一部壊されている。出土土器より古代から中世の遺構と考えられるが、詳細な年代は不明。

南北溝SD597 南北方向の素掘溝で、石組溝SD596を壊している。幅は約70cm、深さは10cm前後。出土土器より14世紀から15世紀頃の遺構と考えられる。『大和国条里復原図』（橿原考古学研究所、1980）では、本調査地点は高市郡路東二十七条一里内の坪境に相当し、SD597は坪界に関連した遺構の可能性ある。

集石遺構SX598 北端で検出した集石遺構。拳大から人頭大の石が集中し、礫の間に瓦・土器を含む。北部は調査区外に続く。西部はSD597と接しており、その範囲は

東西約1.2m、南北1.7m以上である。出土土器より13世紀から15世紀頃の遺構と考えられる。SD597とSX598は、併存もしくは前者が後者を壊していると考えられる。
その他 SX592は南北55cm、東西45cm以上の方形掘形をもつ柱穴で、直径30cmの柱痕跡を伴う。弥生土器と土師器が出土している。SX592と組み合う柱穴遺構は、調査区内では確認できなかった。このほか、南北方向の素掘溝SD593・SD595、小土坑SK594を検出している。

南区の遺構

流路や土坑を確認したが、期待された八条大路北側溝は検出されなかった。床土下面で弥生時代の遺構に達しており、後世に削平された可能性が高い。なお、南区の大部分は旧埋設管の掘形と重複している。

流路SD591 弥生時代後期～終末期の東西流路。北部が調査区から外れるため、幅は確認できていない。調査区内で確認できた南北の幅は約4.8mである。本薬師寺1次調査および1996-1次調査で検出した流路の上流に相当する可能性が高い。

土坑SK590 南北長約70cmの土坑。埋土に炭化物が混じる。遺物は時期不明の土器小破片が数点。（丹羽崇史）

4 出土遺物

瓦類 軒丸瓦1点、軒平瓦1点、丸瓦12点、平瓦54点が出土した。ここでは軒瓦2点を報告する（図94）。

1は複弁八弁蓮華文軒丸瓦6276Aaの破片。灰白色を呈し、胎土は精良、焼成は堅緻である。珠文に伴う範傷はみられない。中区集石遺構SX598出土。6276Aaは本薬師寺創建軒丸瓦のひとつである。

2は瓦当面右上隅の小破片。二重圏線と、内区に下から派生する巻きの強い唐草文をもつことから、均整唐草文軒平瓦6734型式に該当すると考えられる。橙褐色を呈し、胎土には赤色微粒子を含む。焼成はやや軟質であ

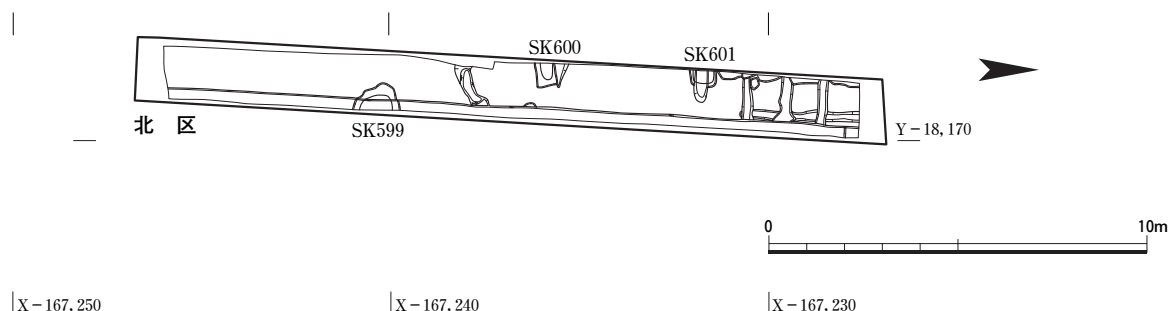




図94 第149-7次調査出土軒瓦 1:4

る。中区の暗灰褐色砂質土から出土した。

6734型式は、下向きの三葉形と上に巻く唐草の中心飾りに、多数の支葉を伴った3回反転均整唐草文軒平瓦である。唐草の先端が玉縁状にふくらむことに特徴がある。A・BおよびC種が知られているが(C種については、山崎信二『平城京内出土軒瓦と信濃国分寺出土軒瓦』『信濃国の考古学』雄山閣、2007)、2のように唐草文右第3単位外側に上に巻く支葉をもつものは、A・C種である。6734Aは、均整唐草文の特徴などから、東大寺式軒平瓦6732型式との関係が指摘され、平城宮瓦編年第Ⅳ期に位置づけられている。出土例が乏しいが、法華寺、西隆寺、平城宮などから出土している。

今回出土の2は、支葉のありかたなどの文様構成に加え、胎土も既出土の6734Aに似るが、6734Aと比較すると、①6734Aでは、2と同位置の唐草文右第3単位主葉の上辺が途切れるのに対し、2は連続して界線に接すること、②唐草先端の玉縁状のふくらみがより大きいこと、などの相違がある。小片のため不明な点が多いが、同範である可能性は低いと考えられ、類例の増加を待つて再検討する必要がある。(次山 淳)

土器 古代を中心として、弥生時代から中世までの土器が整理箱2箱分出土した。いずれも破片である。

北区では土師器、須恵器、弥生土器、青磁などが出土した。土坑SK599・SK600・SK601からは、少量の土師器や弥生土器などが出土した。

中区では、土師器、須恵器など古代の土器を主体として、土師器釜、播鉢、瓦器、瓦質土器、青磁などの中世の遺物や弥生土器が出土した。石組溝SD596出土土器は少量であるが、7世紀前半の高杯などの土師器や弥生土器のほか、1点のみ中世の土師器釜と考えられる破片も出土している。南北溝SD597からは土師器、須恵器、弥

生土器のほか、土師器釜、瓦器碗など中世の土器が出土している。土師器釜は口縁部のみであるが、菅原正明分類の大和H1型とみられ、年代は14世紀から15世紀頃と考えられる(菅原正明『機内における土釜の製作と流通』『文化財論叢』奈文研、1983)。瓦器碗も口縁部のみであるが、川越俊一『大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題』『文化財論叢』奈文研、1983)。集石遺構SX598からは、土師器、須恵器、弥生土器のほか、土師器釜、瓦質土器など中世の土器が出土しており、13世紀から15世紀頃の所産である。なお、SD597やSX598からは弥生土器や古代の土師器・須恵器も多く出土しており、古代までの遺構が中世以降に削平されたことを示唆する。

南区では、流路SD591より後期から終末期頃を中心とする弥生土器が多く出土した。

銭貨 中区灰褐色砂質土より、北宋1056年初鑄の嘉祐元寶が1点出土した。

5 まとめ

本調査では、期待された八条大路北側溝を検出することはできなかったが、弥生時代の流路のほか、素掘溝、石組溝、集石遺構、柱穴などを確認し、弥生時代から中世に至る土地利用の変遷の一端を明らかにできた。

南区で検出したSD591は、弥生時代後期～終末期の流路である。本調査区の周辺では、本薬師寺西南隅と南限の調査でSD591の下流と考えられる流路が検出されたほか、本薬師寺第2次調査(寺域東半部、『藤原概報14』)で7世紀の自然流路が検出されており、いずれも飛鳥川の旧河道に関わるものと考えられる。また、畿内第Ⅱ様式期の溝(第41-15次調査・第45-1次調査、『藤原概報16』)や弥生土器の包含層(第37-1次調査、『藤原概報14』)も確認され、今後さらなる弥生時代の遺構の発見が期待される。

本調査で確認された中世の遺構と関連するものとして、第41-15次調査および第133-3次調査(本薬師寺僧坊域、『紀要2005』)では東西溝が検出され、それぞれ15世紀、13～14世紀とされている。第37-1次調査および第143-3次調査(本薬師寺僧坊域、『紀要2007』)でも中世の溝状遺構が検出されている。それぞれの遺構の時期差に留意しなければならないが、当地の中世集落に関わるものとして注目される。(丹羽)